

アイルランドの文芸復興と ジェイムズ・ジョイス⁽¹⁾

永原和夫

周辺と中心が逆転するのがアイルランド文学の特徴の一つであるが、もしアイルランド文芸復興が何かのいたづらで1915年で終わっていたら、William Butler Yeats (1865-1939) の *The Celtic Twilight* (1893) と John Millington Synge (1871-1909) の戯曲はあったが、James Joyce (1882-1941) はささやかな詩集と短編集しか出しておらず、イエイツ晩年の逞しい詩もジョイスの *A Portrait of the Artist as a Young man* (1916) も *Ulysses* (1922) もなく、ましてや *Finnegans Wake* (1939) は考えられないので、これらから育った Samuel Beckett (1906-89) も James Stephens (1882-1950) も Seamus Heaney (1939-) もなく、アイルランド文芸復興は楽しいが

(1) 本稿は日本英文学会北海道支部第37回大会(北海道大学,平成4年10月4日)のシンポジウム:「アイルランドの文芸復興」で発表したものである。なお、ジョイスの著作は下記の略語で表し、参照箇所を本文中に括弧で示した。

CW Joyce, James. *The Critical Writings of James Joyce*. ed. Ellsworth Mason and Richard Ellmann. London: Faber and Faber, 1959.

D Joyce, James. *Dubliners*, London: Jonathan Cape, 1956.

FW Joyce, James. *Finnegans Wake*. New York: Viking Press, 1939.

Letters II Joyce, James. *Letters of James Joyce*. Vol. II, ed. Richard Ellmann. New York: Viking Press, 1966.

P Joyce, James. "A Portrait of the Artist as a Young Man": *Text, Criticism and Notes*, ed. Chester G. Anderson. New York: Viking Press, 1964.

U +episode and line number. Joyce, James. *Ulysses*, ed. Hans Walter Gabler, et al. New York and London: Garland Publishing, 1986.

余り重要ではない英文学史の小道にすぎなかったろう。

1882年にダブリンに生まれたジョイスは、土地戦争と自治運動が一定の成果を収めアイルランドのナショナリズムが大きく高揚する中で、国民芸術を復興しようという熱い息吹を肌で感じていたが、彼は常にアイルランド文芸復興運動の周辺にいた。ダンテやフランスの詩を読み、イブセン論を *Fortnightly Review* に載せたこの小生意気な大学生は、Irish Literary Theatre は「ヨーロッパで最も遅れた民族の喧噪に身を屈した」(CW70)と公然と非難し、イエイツやAE (George William Russell, 1867-1935)に面と向かって失礼なことを云ったと伝えられている。ジョイスのアイルランド文芸復興に対する反発は、Oliver Gogarty (1878-1957)とPadraic Colum (1881-1972)、そしてイエイツまでも「文学の詐欺師」(the blacklegs of literature, *Letters II* 187)と評するほど激しいものであったことはよく知られている。ジョイスがアイルランドの政治と文学に反対し祖国まで捨てたのは、何物にもとらわれない客観的芸術を創造するためであったというのがこれまでの一般的解釈である。このような余りにも冷たい審美的態度からジョイスを救うために、彼は無政府主義的な政治思想をもっており、それが彼の言語操作に影響を及ぼしていると言う人が最近多くなった⁽²⁾。これらは綿密な調査と説得力のある作品分析にもとづく意見であるが、歴史・社会的な側面からの考察に欠ける嫌いがある。何よりもアイルランドを捨てたジョイスが、なぜ終始アイルランドに固執したかという問いに答えていない。民族運動の嵐の中で起きたアイルランドの文芸復興は国民性の確立という使命を担っていた。ジョイスがイエイツやシングの運動にどうしても賛同できなかったのは、結局、文学に表現すべき民族の魂に関する見解の相違であった。

19世紀末にイエイツたちがアイルランドの文化的伝統を唱えたとき、この国が他に誇るべき文化的遺産を受け継ぐ独自の民族であることを裏付けるた

(2) See Colin McCabe, *James Joyce and the Revolution of the Word* (London, 1978) and Dominic Manganiello, *Joyce's Politics* (London, 1980).

めに必要な材料はほとんどすべて準備されていた。ケルト時代の文学および文化的遺産は、主としてヨーロッパの考古学者や言語学者によってすでに一世紀にわたって発掘、研究されていたのである。Ernest Renan や Marie Henri d'Arbois de Jubainville といったフランスの学者たちはケルト的なものの重要性を認める初期の研究を既に終えており、これらは Matthew Arnold の *On the Study of Celtic Literature* (1867) に受け継がれ内外の読者の注目を集めていた。また、ドイツの言語学研究は古いテキストを発掘し、ケルト語文法は Johann Kaspar Zeuss によって 1853 年にまとめられ、Kuno Meyer の *The Voyage of Bran* (1895) や *Four Old Irish Songs of Summer & Winter* (1903) といった翻訳によって文学的想像をかき立てる準備が整えられていた。

アイルランドでも古文書の保存と英語への翻訳を目的に Irish Archaeological Society が 1840 年に設立され、その後も 1845 年の Celtic Society, 1853 年の Ossianic Society へと研究の輪が広まっていった。その中から John O'Donovan (1809–1861), Eugene O'Curry (1796–1862), Standish Hayes O'Grady (1832–1915) といったゲール学者が育っていった。特に Standish James O'Grady (1846–1928) が Deirdre 神話を英語に書き直した *History of Ireland: The Heroic Period* (1878–80) が、AE, イエイツ, シングたちに与えた衝撃と影響は計り知れないものがある⁽³⁾。もしこの 2 巻の書物がなかったならば、Lady Gregory (1852–1932) の精力的な伝説の収集もなかったろうし、Douglas Hyde (1860–1949) のゲール語復活運動もあれ

(3) AE は オグレイディ 著作集 (Dublin, 1919) の序文で次のように書いている。

“When I read O'Grady I was as such a man who suddenly feels ancient memories rushing at him, and who knows he was born in a royal house, that he had mixed with the mighty of heaven and had the very noblest for his companions. It was the memory of race which rose up within me as I read, and I felt excited as one who learns he is among the children of kings. That is what O'Grady did for me and for many who were my contemporaries.”

ほどの広がりを見なかったであろう。

文芸復興運動の唱道者たちはゲールの伝説や文学の光彩陸離たる豊かさを現代に取り戻し、アイルランドの田舎にいまなお燃え続けるケルト的生活様式の残り火を絶やさないことが、民族の矜持と伝統的統一観を生み、ひいては政治的闘争にそれなしには得られない権威と目的を付与しうると信じていた。実際、イエイツは彼の運動は政治的活動に代わるものと信じ、それが1886年における Charles Stewart Parnell (1845-1891) の自治法案をめぐる議会工作の失敗と1891年の彼の死に続く政治的挫折に起源を持つと言っている。イエイツは政治に裏切られた若い精神は文化に憩いを求めると思っていた。

しかし、カトリック教徒が圧倒的多数を占める国で、民族自立の拠り所となる文化運動に作品や論文を書き、強力にそれを推し進めていった者たちのほとんどすべてが、アングロ・アイリッシュ系の新教徒であったことに注目しなければならない。オグレイディもイエイツも AE もレイディ・グレゴリーもハイドも、みな人種的、宗教的少数派であった。19世紀のアイルランドにおいて、彼らは支配者集団に属するエリートで、この世紀を通じアイルランドの政治的・文化的国粹主義の高まりを苦々しく思っていた。わずかの例を除き、彼らが文化に関心を示すときでも、何らかの形で大英帝国の繁栄に貢献するよう教示しすることを忘れなかった。それならば何故、彼らがあれほどケルトに魅了されアイルランド問題に熱中したのか。

彼らがアイルランドの文化遺産の比類まれな豊かさに純粹に感動し、アイルランド分離主義者の片棒を担ぐことになっても、敢えてその保存と育成に務めたと信ずる理由がある。アイルランドについて語る彼らの著述のすべてに、スタンディシ・オグレイディに特に顕著に見られるのであるが、なにか根元に迫るものを発見しその新奇な美に魂を奪われているとしか云いようのない、感動的な情熱の迸りが見られる。文化は人類共通の遺産であるという考え方はいつの時代でも根強い支持をえるものである。

しかし、T. W. Moody (1907-84) を始めとする修正派のアイルランド学者

の多くは⁽⁴⁾、新教のアングロ・アイリッシュ系エリートがケルト文化に関心を抱いた理由を、植民地社会末期の力関係に求めている。1829年のカトリック解放令以降、新教徒のエリートと彼らの合同政策は繰り返し危機にみまわれた。1840年代の飢饉、1869年のアイルランド国教会制度廃止、1880年から三度の土地戦争、1886年の自治法案の威嚇、これらすべてがそれまで安全を保障されていた尊大な階級の将来に不安をいだかした。ゲールの理想を掲げる圧倒的多数のカトリックからなる新興の政治的ナショナリズムは、しだいにイギリス系プロテスタント社会を駐屯地の外国文化とみなすようになってきた。D. P. Moran (1872-1936) が激しい口調で唱えるアイルランド人によるアイルランド運動は、ゲール語を話すカトリック教徒の国以外にアイルランドの正当な文化的ナショナリズムの根拠はないと主張して、英語を話すプロテスタントの英国系アイルランド人を排斥した。IRB (Irish Republic Brothers) から発展したフィニアン (Fenians) は、ただ戦うことのみで意義を認める一揆主義であったが、アイルランド人民から一定の支持を受け続けたのは、それが絶対的な反英であり、非妥協的戦闘性をもっていたからであった。まったく無権利の状態、イギリスのあくことのない収奪にさらされており、しかも民族運動の主体となるべき階層の育っていないアイルランドにおいて、それが必要だったのである。

このような独立運動の高まりの中で、アングロ・アイリッシュ系のエリートたちは彼らの社会的基盤が、しだいに自信をつけてくるアイルランドの大衆によって脅かされていると感じるようになった。彼らがアイルランドの政治、階級、人種、宗派的対立を超越する理想をケルトに求めたのは、このような社会情勢を無視できない。イエイツをはじめとする復興主義者たちは、彼らの詩や戯曲あるいはパンフレットで、アイルランドの伝統はケルト時代の文学にみられる崇高な自己犠牲を特色とする英雄的精神であり、それは今なお

(4) See Seamus Deane (ed.), *The Field Day Anthology of Irish Writing*, Vol. III (Derry, 1991), pp. 561-680.

神秘に閉ざされた異教的な田舎に生きづいていると繰り返し説いた。彼らの作品に描かれるキリスト教以前のアイルランドは現代の政治的、宗派的争いを知らず、その壮麗な超俗的な美は急進的な国粹主義者の激しい下品な声を戒めている。このような考え方にしたとすると、真のケルト文化は発生的に一貫し、貴族的かつ個性的であり、それは排他的で、宗派的で、民主的で、集団的なアイルランド人のアイルランドや過激な急進派に訂正を促す力強い象徴として彼らの作品に示されている。

アイルランド文芸復興がこのような打算的な利己的側面を持っていたのはたぶん否めないとしても、しかしそれはこの運動の理想主義を曖昧にしてはならないものである。レイディ・グレゴリーやイエイツや AE は、彼らの書物でアイルランドが必要としているものを与え、単なる政治的信条の実利主義を救おうと本当に信じていたのである。このような態度は恩着せがましいといえはそれまでであるが、それがオグレイディのアイルランド史やダグラス・ハイドの *Love Songs of Connacht* (1893)、レイディ・グレゴリーの *Cuchulain of Muirthemne* (1902) といったアイルランド文化史の道標となる作品を生みだした真に愛国的な情熱の源泉であった。

これまでアイルランド文芸復興を、国家の文化的独自性を確立する運動として、政治的ナショナリズムの高揚と植民地末期の社会不安との関係からみてきた。それは理想が現実を無視する構図であり、イエイツは歴史を神話化したと非難される所以もそこにある。しかし、ケルト文化がヴィクトリア朝後期の知識人を魅了するに足る異教的な神秘性を備えていたこともまた否定できない。当時のイギリスは、夥しい工業労働者の群れと科学的懐疑主義がもたらす哲学的、宗教的危機感におびえる不安な中流階級の社会であった。疑惑と社会不安の時代にあつて、マシュー・アーノルドのような人はギリシャ的審美主義に精神の拠り所を求め、John Ruskin (1819-1900) のような人は道徳的社会主義に活路を拓いた。ドイツ・ロマン主義に起源をもつ文化的ナショナリズムは、民族の根底に宿る理性を絶した神秘的精神の存在を認める思想であり、アイルランド文芸復興は当時のオカルティシズムと容易に結び

ついた。イエイツも AE も Dublin Hermetic Society の重要なメンバーであった。こうしてアイルランド文芸復興はますます神秘性を失っていく物質的สังคมで神秘に飢える精神を海綿のように吸収していった。

わずかながらも自分の土地を耕す農民や漁業を営む者たちの、もうすでにプチブル化した後期ヴィクトリア朝のアイルランド社会が人民に共通の古代精神の貯水池であるとはにわかに信じ難いが、文芸復興の理論はそうあるべきだと繰り返し述べている。復興主義者たちは、アイルランドの古文学は民族の真の魂が制度や習慣の下に隠されている聖なる書物であるとみなし、過去の神話・伝説に国家統一の象徴を読んだ。こうして Cuchulain は、復興主義者の作品で、単なる神話上の人物ではなく、アイルランド人の純正な精神の象徴となった。民族の聖なる書物の製作に参加しようとする復興主義者の渴望は、彼らの作品を 19 世紀後半の多くの文学を特徴づけている自然主義や主観主義から遥かに遠ざけてしまった。

アイルランド人の本質を古代の神話と貧しい農・漁民の生活文化に求める点で、文芸復興の作家たちは、政治的には反動的な特徴を持っていた。彼らの保守主義は民族と宗教の問題を貴族的に、あまりにも文学的な郷愁の念をもって扱っているところに見て取れる。アイルランド人は日常道で行き交う好戦的で宗派的で、民主的で、近代的な男女ではなく、「現代の汚泥にみちた潮流」の中で生きるにはあまりにも崇高なケルト人であった⁽⁵⁾。現実の苦難を無意味なものにしてしまうこの催眠的な本質の夢はあまりにも魅惑的で、Patrick Pearse (1879–1916) のような革命家までも虜にした。われわれは、彼の著述で、教育家、芸術家、学者であったピアースが神秘的なロマン主義の夢につき動かされて、流血と浄化の黙示録的行動へ向かった過程を読む。1916 年のイースター蜂起は文芸復興の美学を政治の舞台上で上演した果敢な、それ自体殉教的行為であった。

(5) See W. B. Yeats' "The Statues": "We Irish, born into that ancient sect/
But thrown upon this filthy modern tide."

この仰々しい、ひどく実質を欠いたアイルランドの国民性にいらいらして批判の声を上げるものがいても少しもおかしくない。George Moore (1852-1933) の *Hail and Farewell* (1911-14) には文芸復興のばかばかしい企てを穏やかに風刺しているところがある。John Eglington (1868-1961) はイエイツがあまりも過去にとらわれているとあって、真面目に批判した。C. P. モランはカトリック教徒のアイルランドでケルトの黄昏もないだろうと、復興主義者たちの時代錯誤に厳しい攻撃の矢を放った。

しかし、復興主義者が掲げるパラダイムのすべてに、その作品で、もっとも徹底的に知的な批判を加えたのは、ジェームズ・ジョイスである。『若い芸術家の肖像』で Stephen Dedalus は、この作品で農村出身の国粹主義者の代表として描かれている Davin に、「君はぼくに国家だ言語だ宗教だといった。ぼくはそういう網をくぐり抜けて飛び立つつもりなのだ」(P203) といっている。ジョイスは彼の魂を捉えて離さないこれらすべてを所有することによって、それらから離脱できたのであり、彼の作品は最初から最後までアイルランドとの格闘の記録である。したがって、アイルランド問題を彼の作品から論じるには第一に時間が足りないし、下手をすると彼の複雑な技法の網に捕らわれて出口を失う危険がある。それで、1907年にジョイスがトリエスの大学でイタリア語で行った連続講演を手がかりにこの問題に近づきたいと思う。一回目がこれから取り上げる4月27日のアイルランドの政治・文化史に関する講演で、二回目は、原稿は書いたが実現しなかった、James Clarence Mangan (1803-49) 論で、三回目のアイルランド文芸復興論は、原稿も書かれず実現もしなかった。

“Ireland, Island of Saints and Sages” と題するこの講演の前半は、初期キリスト教時代のアイルランドの素描で、後半はアイルランド近代史におよび、その大英国帝国とローマ・カトリック教会への従属というジョイスの固定観念を扱う結構長いものである。ジョイスのアイルランド史に対する態度は、ローマでの9カ月に及ぶ孤独で惨めな銀行勤めの後だけに、望郷の念抑え難いところがあるが、“critical” なモダニズムの特徴をもっており、伝統に

固執するイエイツをはじめとする復興主義者たちの態度とは著しい対称をなしている。彼らが統一と連続性と調和と遺産を主張するのに対し、ジョイスはいたるところに分裂と非連続と矛盾と喪失を見ている。

ジョイスの素人臭いアイルランド小史がわれわれの目に新鮮に映るのは、復興主義者たちがやっきになって宣伝しているケルト時代をほとんど全く無視して、初期教会史から説き始めていることである。ケルト時代については、「ケルト語を話していた古代人の宗教と文化は後世の者たちがドルイド教と呼ぶもので、ドルイドの僧侶は荒野に神殿を築き、樅の木の森で太陽や月を崇拝していた」とほんの一言前置きするだけに止め、後はながながとキリスト教文化を大陸に伝えたアイルランドの聖人・賢者の名前とその事績を話し出す。それは、「キリスト教時代の最初の一世紀に、聖ペトロの使徒につながるアイルランド人で、後に聖者の列に加えられたマンセウタスが、ロレインの修道院に仕え、そこに自らの教会を建て半世紀にわたって教えを説いた」のに始まり、「スコラ哲学の弁証論『対異教徒大全』の著者、聖トマス・アクイナスを教育するという神聖な務めを果たした、人類の歴史で最も明晰にして俊敏な頭脳の持主、ペトラス・ハイベルナス」に至るまで5頁に渡っている (CW157-61)。

これは、イエイツがケルトの宣伝のために書いた200編以上の文書で、アイルランドの妖精からダヌ神族まで初期アイルランド文化のほとんどすべての項目についてなにがしか述べながら、初期キリスト教会についてはまったく触れていないのと著しい対称をなす。この論文の最後で「新しい復活」の成果を問うているので (CW173-74)、ジョイスがアイルランド文芸復興の活動家を視野に入れてこの論文を書いているのは疑いない。ケルトの古文学を翻訳し文芸復興の開祖と仰がれる Sir Samuel Ferguson (1810-86) とスタンディシ・オグレイディには全然触れずに、*The Rubáiyát of Omar Khayyám* の翻訳者 Edward FitzGerald (1809-83)、*Arabian Nights* を原語から英訳した Sir Richard Francis Burton (1821-90)、ダンテの『神曲』の blank verse 訳を完成した Henry Cary (1772-1844) を挙げているのは、き

わめてジョイスらしい無言の批判である。だからといって、この論文がアングロ・アイリッシュに篡奪された文化史に抵抗し、土地を奪われたアイルランド・カトリック教徒の文化的アイデンティティを主張しているとは考え難い⁽⁶⁾。

この間違いだらけの「伝道と布教と殉教の連綿たる記録」(CW158)は、『ユリシーズ』のキュクロプス挿話でバーニー・キアナンの酒場に大拳して押し寄せてくる聖者の行列の原型であって、この論文でジョイスがより真剣に訴えているのはアイルランドの伝統の欠如である。このことについて彼は次のように云っている。

わが国の文化は最も異質な様々な要素が混ざり合う広大無辺な織物であり、その中で北欧人の攻撃性とローマ法が、新しい中産階級の習慣とキリスト教の遺物が調和している。そんな織物の中に、隣接する糸に影響を与えずに純粹で汚れを知らずに残っているような一本の糸を求めるのは無益である。(CW165)

このように考えると、キリスト教の正統だのケルトの異教だの、アイリッシュだのアングロ・サクソンだのといっ争う意味がなくなってしまう。「この国ではデーン人、ファーボルグ族、スペイン渡来のマイリージャン族、北欧の侵入者たち、それにアングロ・サクソンの入植者たちが融合して新しい国家を造っている」(CW166)。したがって、今のアイルランドから外来の種族の末裔をすべて除くのは不可能だし、愛国者の名簿からアイルランド人の血を受け継いでいない者をすべて除外したら、独立運動の英雄がみんないなくなってしまう。「エドワード・フィツジェラルド郷、ロバート・エメット、テオボルド・ウルフ・トーンとナパ・タンディ、1798年蜂起の指導者たち、ト

(6) Cf. L. H. Platt, "Joyce and the Anglo-Irish Revival: The Triestine Lectures," *James Joyce Quarterly*, 29 (Winter 1992), 259-66.

マス・デーヴィス、ジョン・ミツチェル、ヤング・アイルランド運動の指導者たち、アイザック・バット、ジョゼフ・ビガー、議事妨害の発案者、反教会派の多くのフィニアン、そして最後に、これまでアイルランド人を指揮した最も恐るべき男、チャールス・スチュアート・パーネルの血管の中にはケルト人の血は一滴もなかった」(CW162)。これだけアイルランド独立のために戦ったプロテスタントのイギリス系アイルランド人の英雄を並べられれば、どんなにカトリックのアイルランドを主張する者だって戦意を喪失してしまう。

しかし、ジョイスはイギリスの植民地政策に同調する日和見的な便宜主義者では絶対でない。生粋のアイルランド人として、変節カトリックとしてジョイスは、イギリス絶対主義王政がアイルランドに異教徒刑罰法を敷き、産業を抑制し、巧妙な南北分断政策をとって政治的に疲憊させた非を難じ、Oliver Cromwell (1599-1658) の無差別虐殺や放火、略奪、鞭打、殺人など暴虐のかぎりをつくして1798年蜂起を弾圧したGerard Lake (1744-1808) 将軍の14万軍勢の悪逆非道を暴きたてる点で、人後に落ちない。この論文でジョイスがイギリスの圧政を論じるとき、キュクロープス挿話の「市民」と同じくらい雄弁である。

アイルランド市民が反動主義者でカトリック教徒である理由を理解するのに何の苦勞もいらない。彼にとって、市民の権利を守る偉大なる護民官は火と剣をもって彼の信仰を押しつけるためにアイルランドに渡来した野獣である。彼は、ドロゲダやウオータフォードの略奪を忘れない、ピューリタンに「海に落ちるか地獄へ落ちれ」と追い立てられて島のはずれに逃れた男女の群れのこと、イギリス人がリメリックの破れ石に誓った偽証のこと、どうして忘れられようか？ 奴隷の背中が鞭を忘れられようか？ イギリス政府がカトリックを追放したときにその精神的価値が高まったのだ。(CW168)

アイルランドの国粹主義にたいするジョイスの態度は無関心というより挫折と嫌悪に近い。彼は、スティーヴンと同じように、パーネル伝説で育った。彼が、彼なりの精神的立場を譲らずに、パーネルを崇拜したのは、パーネルが政治においても Kitty O'Shea 事件においても、カトリック・アイルランドの道徳律に対し、一貫して超然たる態度を通したからであった。パーネルを失脚させ、死に追いやったのはイギリスではなく、アイルランドの大衆であった。ジョイスはアイルランド革命史が裏切りの歴史であることを痛いほど承知している。アイルランドは「シーザーとキリストが結託する」ダンテの地獄の戯画である (CW243, SH164)。ジョイスは、プロテスタントを排除する宗教的自由を唱えるカトリック連盟にも、絶対的反英を誓う武装集団フィニアンにも懐疑的であった。どちらも容易に偏狭で排他的な愛国主義に陥り、暴力を肯定するからである。この点だけをとっても、ジョイスには、アイルランド・ナショナリズムは誤っていると思えた。国民性とナショナリズムの思想を余りにも狭く規定し、国家と宗教との関係を論じるのを怠っているからである。「ローマの暴虐が魂の殿堂を蹂躪しているときにイギリスの暴虐に怒号を浴びせて何の益かあらん」(CW172) と、ジョイスはトリエステ論文でいっている。スティーヴン同様、アイルランドには頭の中から追放しなければならない主人が二人いるのである。

作家としてのジョイスが民族運動に加わるのを阻んだ大きな障害の一つに、この運動の言語に対する態度があった。彼は弟 Stanislaus Joyce (1884-1955) に、「もしアイリッシュ・プログラムがアイルランド語を強要しなかったら、私は自分をナショナリストと呼べると思う」(Letters II 187) と述べている。ゲール協会は、「アイルランド民族は、言語、伝説、音楽、才能、理念のなかにもっていたいっさいのものを失った。われわれがアイルランド民族、ゲール人を新たに復興しようとした時、われわれは民族性というレンガを奪

(7) Douglas Hyde, "The Necessity for De-Anglicising Ireland," *The Field Day Anthology of Irish Writing*, Vol. II, p. 530.

われていることに気がついた」という認識のもとに⁽⁷⁾、1893年にダグラス・ハイド以下10名によってゲール語の保存と復活を目的に設立された。この言語運動はすぐに政治的民族運動と結びつき、ハイドの周辺には、純粹にアイルランド的なもの以外はいっさい否定する傾向が生じた。『ダブリン市民』の“The Dead”に登場する Miss Ivors もそういう仲間の一人で、彼女の質問責めに辟易して、Gabriel は「アイルランド語は私の言語ではない」(D216)と言ってしまふ。ジョイスが許せなかったのは、ゲール協会やその追随者たちが、征服者の言語を使っていること自体なにかを失しなっているのに気づかずに、いまはもう死んで過去のものとなった言語を弄び自分自身を欺いていることだった。『肖像』のステイーヴンは自分が使っている言葉と King's English との違いを痛烈に意識している。彼の大学で哲学を教える英国人のカトリック牧師との言葉をめぐる有名なやりとりで、ステイーヴンは次のように述べている。

いま使っている言葉はぼくのものである前に彼のものだった。家庭、キリスト、黒ビール、主人(home, Christ, ale, master), このような言葉は、彼が云うのとぼくが云うのとでは、雲泥の差だ。ぼくには安心してこうした言葉を口にすることも書くこともできない。使い慣れた言葉で、しかもどこまでいっても外来語である英語は、自分だけにはいつまでたっても借り物なのだ。ぼくがこさえてやった英語の言葉も、もらい受けた言葉もない。その言葉を口にするぼくの声はいつまでもよそよそしい。ぼくの魂は英語の影法師のなかで苛立つ。(P189)

芸術家ジョイスの出発点は、アイルランド人は言語伝統を喪失した民族であるという深い認識にある。言語は過去の遺産を現代に引き継ぐ器であり、民族の精神に生きる絆をあたえるものである。実に、人民の精神は彼らの言語に息づき、言語で表わされる伝説や文学、唄や物語のなかに込められているといえる。このような言語伝統が断ち切られているということは、したがっ

てその国の神話・文学観に決定的な影響を及ぼす。イエイツをはじめとするアイルランド文芸復興の唱道者たちは、神話を一つのイデオロギーと考え、アイルランド現代史における征服者と被征服者、プロテスタントとカトリックとの血塗られた闘争の傷をいやし、これを統一する超時間的な理念として要請していた⁽⁸⁾。神話は、彼らにとって、歴史から逃れる神聖な隠れ家、文化的統一の夢を宿す時代を超越した原型からなる大いなる伝統であった。ジョイスはこのような歴史を無視した思想を受け入れることはできなかった。彼にとってアイルランド神話は、『肖像』のスティーヴンが農村出身の国粹主義者デイヴンについて次のように語っているように、断片的で、一貫性を欠く空想の産物でしかなかった。

彼は乳母からアイルランド語を教えこまれたり、アイルランド神話の断片的な知識で大ざっぱな空想力を養ってもらった。彼は、まだ誰もそのために一行の美しい詩を書いたことのない神話や、サイクルが展開するにつれて分裂して行く膨大な物語を、まさにカトリックに対すると同じような遅鈍忠誠な農奴の態度で信じ込んだ。思想でも感情でもいやしくもイギリスからあるいはイギリスの文化を通して来たものには、彼の心は格言通り固く武装していた。(P181)

『ユリシーズ』や『フィネガンズ・ウエイク』の作家にとって、神話はアイルランド人を既に決められたある型に押し込み、現代という混沌としたパノラマに秩序と統一をもたらす鋳型ではない。Leopold Bloom は古代の理想的英雄像に照らして批判される脆弱で、些末なことに拘泥する惨めな現代人であるばかりでなく、彼はその生き生きとした現実性と旺盛な好奇心で硬直化した神話を破壊し、訂正を促す逞しい現代の英雄でもある。ジョイスは神話

(8) See Richard Kearney, "Utopian and Ideological Myths in Joyce," *James Joyce Quarterly*, 28 (Summer 1991), 873-78.

をそれに服従し、調和、順応すべき神聖な基準としてではなく、反抗し、違和を唱え、われわれの精神を解放してくれる人類の貴重な遺産と考えている。彼の作品で、アイルランドに統一をもたらすべき Fionn, Oisín, Cúchulain は笑いを誘う道化に変えられている。彼らは唯一の人格を持つ神聖な人物ではなく、“Bringer[s] of Plurabilities” (FW104.02) として、古い独裁者に反抗する新しい英雄であり、また新しい世代と張り合う頑固爺でもある。また、Shan Van Vocht, Cathleen Ni Houlihan といったアイルランド神話の母神像は、「仔豚を食う雌豚」「ミルク売りの老婆」「ガミー・グラニーばあさん」に換えられ、われわれが神聖にして犯すべからざるものとしているイメージを新たに認識しなおすことを要求される。ジョイスは、神話によってアイルランド人を一定の型に押し込むのではなく、神話を可能性の運動場に持ち込み、イデオロギーと化した過去の住処から歴史意識を解放する手段とする。ジョイスの作品でケルト神話はギリシャ神話だけでなく、バビロニア神話や聖書神話と衝突し、収斂し、合体する。この脱構築と再構築の過程の中でこれまで不可能だったものが可能になる新しい場が開かれるのである。

イエイツは自分が Jonathan Swift (1667–1745), Edmund Burke (1729–97), George Berkeley (1685–1753), Oliver Goldsmith (1728–74) の衣鉢をつぐ者だといって、これらの人々によって代表される文学をアイルランドの唯一正当な伝統としている。彼らは、ジョイスがトイエステ論文でいうように、「17, 8 世紀に英語を受け入れて、ほとんど祖国を忘れたアイルランド作家」(CW170) である。われわれはそういう者たちの中に Richard Steele (1672–1729) と Richard Brinsley Sheridan (1751–1816), そして George Bernard Shaw (1856–1950) と Oscar Wilde (1854–1900) も加えることができるであろう。彼らは生まれはアイルランドであるが、アイルランド語をまったく省みず、もっぱら英語だけを用いて、主としてイギリスの読者を対象にものを書く、いわゆる Anglo-Irish writers である。

この他に少なくとも三集団のアイルランド作家について、ジョイスは彼の著述で触れている。一つはジョイスが敬愛してやまなかったジェイムズ・ク

ラーレンス・マンガンと共に途絶えた古いケルトの吟遊詩人たちが三段階にわたって語り継いだ長い伝統である。マンガンの死と共に「伝説の予言者、放浪詩人、そして王党派の詩人が何世紀にもわたって語り継いだ古い民族の魂はこの世から消え失せた」(CW173-74)と、ジョイスは「アイルランド、聖人と賢者の島」で述べている。もう一つがイギリスの主人の家で野蛮で、物悲しいアイルランドの異境振りを披露して頭を撫ぜてもらって喜んでいる道化集団である。ジョイスはこのような屈辱的なアイルランド詩人の代表者として、*Irish Melodies* で名声を博した Thomas Moore (1779-1852) を挙げている。『肖像』でスティーヴンが Ben Jonson (1572-1637) の詩をくちずさみながらのろのろと大学へ向かう途中、「アイルランドの国民詩人の道化た像」(P180)の前を通るところがある。トム・ムアの像は、適切にも、Trinity College とかつて Henry Grattan (1746-1820) の国会とよばれていた建物の間、すなわちアイルランドにおけるイギリス支配文化の二つの拠点の間に立たされている。彼にはその像の引きづった足にも、卑屈な頭部にも、肉体と魂の弛緩が一面に目に見えないしらみのように這い回っているように見えた。まるで「マイリージア人の外套を借着しているファーボルグ人」(P180)だという。つまり征服者のお仕着せを着せてもらっている土着民だというのである。アイルランド語の歌をイギリスの居間向きの端唄に換えて英文学の歴史の中でそれないの名声を博したムアが、スティーヴンにはアイルランドのこの種の作家の屈辱的な地位を象徴しているように思えたのである。

そして最後の集団は、ジョイスがイエイツと彼の劇団をはじめて公に非難したあの“The Day of the Rabblement” (1901) でいった、「今まさにクリスティアで生を終えんとしている老師の伝統を継ぐ価値のある者たち」(CW72)、すなわちジョイス自身とその後続くベケットやスティーヴンズといった国際的なアイルランド作家の群れのことである。スティーヴンは『肖像』の4月6日の日記で、「マイケル・ロバーツは忘れられた美を記憶し、その腕に彼女をいだくとき、この世から消えて久しい麗しきものをだきしめる。そうではない。全然違う。ぼくはこの腕にいまだこの世に現れたことのない

麗しきものをだきしめたい」(P251)と記している。イエイツのアイルランドは「この世から消えて久しい」ケルトの美をだきしめる国であり、ジョイスのアイルランドは精神的現実をもたない伝統を喪失した国である。書くべき現実を剝奪された作家にとって書くことはそれ自体が目的となる。「いまだこの世に現れていない麗しきもの」とはそうしたものである。アイルランド文芸復興の神話を拒絶し、伝達の糸を分断することに専念したベケットにとつても状況は同じであった。ジョイスもベケットも、そしてジェイムズ・スティーヴンズもみな、自分たちの言語であってあくまでも外国語である英語に反発し、その可能性を徹底的に追求し、時にはこれを分断し、溶解し、de-Englicizeしたアイルランド人で、国際的なモダニズムの根底である社会と文化の断絶を自分の国の歴史に見ていた人たちである。彼らの中から現代アイルランドを代表する Thomas Kinsella (1928—), John Montague (1929—), シェムス・ヒーニィといった作家が生まれた。こうしてイエイツたちの文芸復興が終焉を迎えたとき、その周辺にいた人たちがアイルランド文学の中心になったのである。